

令和4年度第2回 滋賀県観光事業審議会 議事概要

1 開催日時、場所

日 時：令和5年3月27日（月）10:00～12:00

場 所：滋賀県庁 合同庁舎7-A会議室

2 出席委員（敬称略、五十音順）

○委員：石川 亮、伊吹 惠鐘、上田 未来、植西 祐一郎、金子 博美、佐藤 泉、
野村 ゆき子、羽田 真樹子、日比野 敏陽、廣岡 裕一、松田 大祐、
宮川 富子、吉田 満梨

○オブザーバー：

原田 晋司、濱 秀樹（代理出席）

3 議題等

■ 浅見商工観光労働部長挨拶

■ 定足数の確認

■ 議題1 令和5年度観光施策の基本方針

事務局より令和5年度観光施策の基本方針について説明。

意見および質問はなし

■ 議題2 シガリズム2年目の展開

（吉田委員）

1年目の成果で64個のコンテンツができているということは素晴らしい。

2つ質問がある。

1つ目は、滋賀県は歴史も自然もたくさんあり、総花的になっているというのが問題であった。シガリズムのプロモーションでは、大河ドラマや万博をぜひ活用したいところであるが、シガリズムの枠組みがわからなくならないか。シガリズムの枠の中に位置づけられているということ、どのように発信していくか。

2つ目は、65のコンテンツを、今後どのくらいの数を目指して増やしていくのか。高島市でも観光ビジョンを新しく作り、コンテンツを作ろうとされている中で、今後どのように連携されていくのか。

(辻室長)

シガリズムの観光振興ビジョンは、9年間で2030年までの計画期間として描いている。これまでの本県のキャンペーンなど1年ごとに変わるような内容ではなく、滋賀ならでの新たなツーリズムを「シガリズム」として9年間しっかり普及させ、続けていく。その中で、大河ドラマなどトピックで出てくる際には、紹介するコンテンツが、人に焦点が当たるように、そしてファンになってもらえるようなコンテンツを作っていきたい。

高島の「白湖（ハコ）」では、日替わりでいろいろな事業者さんが来られて事業を実施されているが、まさに私たちが目指すシガリズムと同じだと思っている。滋賀県内には数多くの魅力的な人が提供する体験や食などがまだまだある。今年は65のコンテンツを創出したが、今年、来年、再来年と、シガリズムビジョンの回復期に位置づけている3年間でしっかりと作っていく。また、作って終わりではなく、作っても売れないと消えてしまうので、新陳代謝を一定行いながら、滋賀県の観光の底上げを図っていきたい。

(吉田委員)

数を大きく増やすというよりは、安定的に供給されていくということがわかった。また、地域のよい取組をされている事業者を発掘されてコンテンツを作られているということがわかった。そこに各自治体がどのように関わるのかが、課題であるということを再認識した。

(辻室長)

シガリズムコンテンツ創出の際には、びわ湖高島観光協会からもヒントをいただいた。コンテンツの創出には、観光協会や自治体が手を引いた時に、事業者がなくなるということにならないように、あくまでも伴走支援という形で関わっている。米原市や東近江市でも同じような取組をしているが、あくまでも事業者がやるという前提で、そこに販売チャンネルの紹介や、HPの入力や紹介文の書き方のお手伝いをしており、何から何までこちらがやるというものではない。

(松田委員)

亀岡の刀作りは、鬼滅の刃の影響もあり流行っているが、距離が遠いという課題がある。そういう点で草津は非常に魅力的だと思った。少人数だと事業化や継続が難しいと思うが、事業者の方が主体的に取り組まれているということが理解できた。販売チャンネルについては、どこで何が売っているかということが混在しないよう、インバウンドも含めてうまくお知らせすることが大事だと感じた。

(野村委員)

シガリズム体験について、多言語化も予定されているか。WEBでの受付といった対応もされるか？

(辻室長)

来年度中には順次対応していきたい。65コンテンツすべて多言語化できるかは、受け入れ側の事業者さんの事情もあるため、インバウンドまで対応したいという事業者については多言語化対応していきたい。併せて、たとえば翻訳機や外国語ガイドによる対応といったバージョンアップも検討していきたい。

(野村委員)

申込期限はコンテンツによって様々なようだが、外国人に人気がありそうなツアーの、締め切りが早めになっている。そういったところを工夫していただきたい。

(辻室長)

申込期限が間際過ぎる、という課題もある。そういった課題を一つずつ潰していかなければならない。まずは事業者さんに始めてもらうところからスタートおり、さらにインバウンド向けの対応をしていただくためには、事業者さんにも頑張ってもらいたくないが、きめ細かく対応しながら作っていきたい。

■ 議題3 ビワイチ取組の加速化

事務局よりビワイチ取組の加速化について説明。

(金子委員)

シガリズムとビワイチの取組をバラバラではなく、一つの取組のように見せるということはどうか。例えば、シガリズム体験のところに自転車を駐輪できるのかとか、どういうルートがおすすめるかを示すなど取り組んではどうか。

(海老根室長)

シガリズムとビワイチをバラバラに体験いただくのではなく、県として組み合わせが必要と感じている。今後、レンタサイクルのワンウェイ事業やビワイチの子事業の中で、シガリズムコンテンツツアーを入れ込んだモデルツアーや、サイクリングガイドさんにもつないでいただけるような仕組みを進めていきたい。

(宮川委員)

ビワイチもシガリズムもそれぞれ頑張っているのは伝わるが、なんとなくトータル感が無い。ビワイチは環境にも非常に良く、子どもから高齢者でも走れるようなビワイチだと思っているが、コンセプトをもっと強烈なインパクトのあるものにすべきでは。県外の人に認知されていないと感じる。

(海老根室長)

PRについては、さらに勉強していかなければならない。ビワイチとシガリズムが一体となって、滋賀に行ってみたい、と思っただけのようPRしていきたい。

ビワイチは、環境に優しく、健康面でも良い、だれもが楽しめるという点をうまく組み合わせながら、滋賀でしか味わえないシガリズムコンテンツに結びついてイメージしていただけるよう発信していきたい。

(石川委員)

シガリズムとビワイチは一緒になったらいいなと以前は思っていたが、ここ数年でビワイチの事業に参加させていただく中で、シガリズムは観光の軸だと思うが、ビワイチは健康しやCO2 ネットゼロや様々な目的にスイッチできるものだと思う。このためシガリズムとビワイチは直結するものではなく、うまくつないでいくことをじっくり考えたり試したりしながらやっていくべきだと思う。ビワイチは、滋賀県の良さをつないでいくコンテンツだと思うので、現在は観光に位置づけられているが、もしかしたら違うかもしれない、とも思う。ビワイチとシガリズムは、棲み分けながら、それぞれが連携する見せ方が大事だと思う。

(辻室長)

大きな枠組みのシガリズムの中にビワイチも含まれているが、魅力のPRは滋賀県の以前からの課題である。コロナ禍において、SNSの発信が重要になっており、行政や観光協会だけではなく、体験された方に発信していただくことが必要になっている。口コミサイトが大きなシェアを取るようになってきているので、感動体験を書いてもらえるように、体験を提供していきたい。その体験を巡るツールの一つがビワイチであり、単純にビワイチをしていただくことも感動体験になると思う。

■ 議題4 ここ滋賀拠点の最大化

事務局よりここ滋賀拠点の最大化について説明。

(廣岡会長)

来館者売上状況には、拠点外販売も含まれるのか。

(青田所長)

売り上げには含まれている。来館者については、ここ滋賀店舗のカウンターで把握しているので含まれていない。

■ 議題5 その他

事務局より令和4年度滋賀県観光入込客統計調査速報値について説明。

(廣岡会長)

議題5だけではなく、これまでの議題や総合的になにか御意見や御質問があればお願いします。

(伊吹委員)

「ビワイチの子推進事業」について、数十年前からやってはどうかとはアイデアを出していたので感無量である。現在、県では小4を対象に山の子、小5ではフローティングスクールで体験学習を行っている。滋賀県は山で湖が囲われており、中が盆地であるため、里を学ぶにはビワイチが最適と思っている。それを風の子にしてはどうかと言っていた。しかし、子どもに自転車で走らすのは危険である、という理由で学校現場ではリスクが大きいと、とてもできないということだった。20年ほど前に、とある小学校の保護者が琵琶湖一周を行ったが、結果は大反響だった。しかし、学校教育の中で取り組むというのは非常に高いハードルがあるので、保護者会や子ども会で取り組まれると良いと思う。

私が過去に企画した取組では、小学生で参加した子が、大きくなってスタッフになってくれた。このようにサイクルしていくと、永続的に続いていくと感じた。ビワイチの子の事業は子どもにとって非常に大きな体験学習であると思う。必ずしも学校ではなく、地域と一緒にやって行るのが良いと思う。また、この事業は次の世代を育てるということにもなる。単なる自転車ということではなく、シガリズムのツアーも体験しながら、電車でもできる、それがビワイチであるという大きな概念でくくってもよいのではと感じた。

(羽田委員)

今こそ滋賀を旅しよう！の周遊クーポンを活用させてもらってありがたかったが、今回のクーポンが電子クーポンのみということで、携帯のキャリアによっては圏外になるエリアであるため、今回のクーポンは活用できないと諦めた。携帯の圏外である田舎の地域は取り

残されたという思いがあった。田舎のことも考慮していただければと感じた。

(辻室長)

今年年明けから電子クーポンになったが、電波が届かないところであれば、紙クーポンをもらっていただく仕組みがあるので、相談させていただきたい。全国旅行支援を6月末まで延長したが、予算が残っていないので、うまくいって5月末くらいで終わるかという状況である。コロナ禍に始まった事業であるが、ずっとクーポンというところからある程度脱却していかなければならないので、そこはシガリズムで頑張りたいと思う。

(植西委員)

次年度予算について、大金ではあるが厳しい予算の中でやりくりされていると思う。キャンプ場の有料実験を滋賀県で開始されると思うが、サービスの対価をしっかりと取って、そのお金をさらに誘客・プロモーション・インフラの整備等の投資に回していく好循環ができれば良いと思う。次年度以降、11億以上のお金の中で、様々な投資をされていかれると思うが、インカムの動きについて、どのように考えられているのかを聞きたい。

(辻室長)

湖岸の有料化については、草津市の「志那2」というところで、4月28日～5月7日まで、1回あたり従来は無料だった駐車料金を2000円にする実証実験を行う。当実験は県庁の都市計画課で実施するものであるが、観光の場合は、自分達で稼ぐというよりはそれぞれの持っている素材をいかに地域経済に回すかが重要である。シガリズム・ビワイチ・ここ滋賀ともに、基本的には利用者の方に納得いただくよう、金額以上の体験を提供することを通じて、経済的にも滋賀県にお金が落ちるようにしていきたい。シガリズムの考え方としても、付加価値の向上が重要であり、人数を増やすことは難しいかもしれないが、消費単価を向上させていく取組につなげていきたい。

(佐藤委員)

シガリズム体験や、ビワイチについての熱量が、北の方ではまだ弱いと感じる。情報共有しなければならないし、少し取り残されているようにも感じている。関係事業者との連携の話があったが、現場の方と議論を重ねていきたいと思う。長浜は開城450年の年であるが、既存のイベントに冠をつけただけではいかという指摘もある。県と連携をとりながら進めたいと感じた。

(日比野委員)

北部地域の観光促進について、滋賀県全体を関連付けて観光振興をするという点と、一方で北部地域に特化して魅力を訴えていくとのバランスが難しい。長浜市とスノーピークが提

携してグランピング施設を整備する計画があった。特定の地域を盛り上げることになると、なかなか全体を回ってもらう訳にもいなくなる。北部地域には今のところ「観光促進」としか出ていないので、各自治体がそれぞれ頑張る以外に、滋賀県としての具体的な取組をどのように考えておられるのか。

(辻室長)

シガリズムの体験コンテンツをもう少し北部地域で出せたらと思っている。現在のコンテンツでは長浜の黒壁での駅前の体験しか作れていない。湖北はいいところがたくさんある。特に木之本は、魅力満載の地域。県内最古の図書館である湖北図書館があり、それを守っている方々の活動や、木ノ本の琴の糸などの魅力を伝えていくことが大事である。長浜開城450年に合わせて4月14日の曳山祭りでは全13基が出てくるなど、地元の動きも活発になっている。県としても、その動きを捉えて、応援しながら伝えていく。そのためにも、まずは自分たちが地域の魅力知り、自分たちの口で伝えていくことが大事だと思っている。

(海老根室長)

ビワイチでも北部を回っていただけるような仕組みを作っている。例えば、東京から来られる方は新幹線を利用され、米原駅サイクルステーションでレンタサイクルを借りて、湖北の素晴らしい景色を眺めて今津あたりで1泊されるというケースが多い。そういったことをPRしていく。北と南で風景が異なり、北の方は景色が素晴らしいと皆さん口をそろえて言っている。ビワイチ・プラスでは余呉湖や、長浜のシガリズムコンテンツにつなげるような周遊観光を進めたい。その仕組みの一つとして、サイクルサポートステーションやサイクリストにやさしい宿など、皆さんに立ち寄っていただけるような拠点をもっと増やして、楽しくサイクリングをしていただき、地域観光が進むようPRしていきたい。

(青田所長)

東京で展示されている長浜の観音さんを見て、ここ滋賀に来ていただいた方が、東京で見ただけではなく、現地で観音さんを見たいとコンシェルジュにルートの相談をされたことがあった。長浜市職員OBの方がここ滋賀で滋賀の歴史や彦根城、近江の城跡のことなども話をしていただくなど、

ここ滋賀で県の歴史・文化を知るところにより、東京から現地の滋賀に来ていただくということに広げていきたい。そういう意味での北部振興ということに関わっていきたい。物産では高島ちぢみさんに来ていただき販売した。ちぢみを着た方が、作っている現場も見てみたいという声もいただいている。ここ滋賀でできる北部地域の振興にこれからも取り組んでいきたい。

(上田委員)

高島市で白湖を運営している。また近江高島駅周辺の重要文化景観である大溝の水辺景観を活用した町づくり団体の事務局も務めている。高島の観光もまさにシガリズムだと思っている。観光に留まらず、高島そのものである。生活文化など、まさにシガリズムにぴったりだと思うが、高島にいるとシガリズムの言葉は聞かない。伴走支援ということが出ていたが、すでにあるシガリズムをどう拾っていくか、自分に関係ないと思われている事業者さんにもできることはあると思う。そこに対するコミュニケーションや、手の差し伸べ方が大事だと思う。観光と日常の接点がシガリズムにすごく当てはまる。高島は観光と日常の関わりがとても色濃い地域。特に海津の桜は、これから非常に多数の来客がある。地元の方は早く過ぎ去ってほしいと思われながら過ごされる。素晴らしいところなので、多くの方に来られるのは仕方ないことではあるが、観光を毛嫌いされるところがある。これから、コロナ禍が明けていくときに、これまでの状況に戻ります、ではなくこれからの観光という概念を変えていかなければならない。滋賀県がそれをされていくことがすごくぴったりだと思っている。

シガリズムが観光やPRという面において、固定概念を変えていくものになっていくと素晴らしいと思う。PRの仕方もこれまでとは変えていかなければならない。滋賀県に住んでいる人に寄り添ったもの、違和感のないもの、外の方に良さを感じていただけるものになったらいいと思う。

(辻室長)

滋賀県ではオーバーツーリズムはないと思っていたが、白髭神社や海津大崎など、地元の人が望まないことにならないようにしないといけない。観光と日常が対立しない観光を作らないといけないし、そのように伝えていかないといけない。

(山添局長)

滋賀県ではシガリズムと言っているが、なかなか各市町の観光ビジョンや冊子にシガリズムを貼っていただけないというところがもどかしい。県では観光人材の育成を3年間かけて実施した。各市町の観光協会のプロパーの方や担当者の方などに研修を受けていただき、フィールドワークなどを通じて、実際にコンテンツを作れるようになるところまでやってきたつもりである。滋賀県のシガリズムというコンセプトが各市町と一緒に発信できると、もっとシガリズムが各市町の中に浸透していくと思う。東近江でも同じような冊子を作られているが言い方が違っていたりするが、気持ちは県も市町も同じだと思っている。

本日は、近畿運輸局からお越しいただいているので、日本の中での滋賀県の立ち位置や、世界から選ばれるための取組についてアドバイスがあれば教えてほしい。

(原田オブザーバー)

今月末に新たな基本計画を策定するところだが、その中の柱が「持続可能な観光」「消費額拡大」「国内空輸の拡大」である。滋賀県の計画はそれがすべて詰まっていると思った。コンテンツ造成がすごく進んでおり、一体感を感じた。次のステージはインバウンドもあるが、付加価値の向上である。もう人を追う時代ではなくなっている。実際にそれをやると持続可能な観光にはならないことは明らかであるので、先進的な取組になっていると思う。大阪や京都は現状のままでもオーバーツーリズムになる。沖縄は潤っているように見るが、地元にお金が落ちていない。滋賀県では、しっかり地元にお金が落ちていると感じた。他の地元の人が、取組みを頑張っていることを宣伝できるような環境ができればいい。4月以降、滋賀に住んでいる同僚などから、この取組について宣伝してもらえるようになることを期待している。

(金子委員)

「今こそ滋賀を旅しよう」の取組が他の県よりも早く、長くして下さったことが観光事業者にとってはありがたいことだった。まだまだ滋賀県は何もしなければ誰も来てくれない、という状況である。「今こそ滋賀を旅しよう」でインパクトを与えていただき、旅行しやすい環境を与えていただいたことに感謝する。体験コンテンツについては、観光事業者ではないところを一つ一つ発掘されたことは大変御苦労いただいたと思う。これからも「観光とは」ということを説明していただく必要がまだまだあると思う。オーバーツーリズムのような観光に対して悪いイメージを抱かれている県民の方がいる中で、みんなが来られる方を温かい気持ちで迎えられる県民性になれることを願っている。ビワイチでも自転車邪魔だと思われるような受け入れ側の気持ちも一緒に育てていかないといけないと思う。ビワイチの道路についても、短い期間にかなり進められたことは大変すばらしいと思う。ここ滋賀も第2期でだいぶイメージが変わり、私たちが思うここ滋賀にやっとなってきたと思う。来られる方は、滋賀県に由来がある方が多いのか、由来がない方が多いのかや、どういうものが売れているのかが知りたい。

(青田所長)

勿論、滋賀県ゆかりの方もおられるが、日本橋の交差点にあるので、店に入ってから「ここは滋賀県の店なんだ」と気が付かれる方が多い。改めて滋賀を知っていただける場所であると思っている。

赤こんにやくや、毎月蔵元からお越しいただき実施している地酒の試飲販売会も好評で、地酒が多く売れている。滋賀県の方が来られて、あまり見ないお酒だから買おうという方もいる。また、鮎ずしもお好きな方は勿論だが、初めての方にも好評である。

(宮川委員)

彦根城の世界遺産登録に向けて頑張っているところ。観光は町を壊してはいけない。世界遺産も観光のためだけではない。世界遺産登録になると、彦根は町づくりが大変大きな問題になるが、住む人がいないと町ではないので、住む人が大変な思いをするようでは観光としては問題がある。住む人も「皆さん来てくれてありがとう」と思われるような観光のスタイルを作っていかなければならない。世界遺産に登録されたら、何もしなくても京都以上に来てもらえ、有名になると思っている。なかなか発展できない湖東・湖北地域にとっても非常に大きな起爆剤になると思っている。応援していただきたい。

(オブザーバー (濱事務局長代理))

来年度は、シガリズムコンテンツの充実が課題になる。滋賀にはの今まであまり知られていないところも含め、魅力が詰まっているので、今年種を撒き、育ちかけているものをさらに育てていきたい。できれば、より幅広い年齢層に、全国各地からより来ていただけるように、引き続き検討していく。

■観光振興局長挨拶

<閉会>